

極微の世界を讀みて

正會員 濱 田 秀 雄*

現代の物理学が原子核及び宇宙線に関する諸現象の研究にその中心を置いて居る事は一般に言はれて居る事である。本書もその説明の中心を矢張この問題に置いて居る。この極微の世界と我々の世界とを對比して我々の問題を如何に解き又極微の世界如何に考へるかは興味ある問題であらう。

今日の量子力学に依れば如何なる種類の微粒子でも連続と不連続の二性質を具備して居る、と言はれて居る之を我々の世界の交通機關に取つて考ふれば一般に交通路は連続性を持った物であり運搬具は不連続性を持ったものである。此の連続性を持った物と不連続性を持った物とが寄つて交通機關を形作つて居る。

即ち我々の世界に於ては此の二物が寄つて初めて微粒子の様な性質を具備するのであるが之を微粒子を観察したと同じ様な観察方法を用ゆるとどんな物になるであらうか。即ち若しも我々が微粒子の或る姿で或る姿の微粒子を観察した様に交通路を通じて交通機關を観察するならば交通機關は不連続性の物となるべしこの逆に運搬具を通して交通機關を観察するならば連続性を具備した物と観察されるのでなからうか。即ち我々が第三者となつて

外部より交通機關を観察する故に我々は二個の物と見るのであるが若しも我々が第三者とならず交通機關その物となつてしまへば同一の物が二性質を有する様に観察されるのではなからうか。

結局物は観察の方法に依つて斯くも異なる物となつて我々の目前に現はれる。近頃我々の間に言はれる河水の問題にしても立場が異なればその結果が異なるのは當然で他人の言ふ事が自分の思ふ事となる異からと言つて怪むには當らない。従つて國家的立場と云ふ場合にも常に自分の世界觀に基く國家的立場であるのかも知れない。

此の書物の終り頃に自然と人間と云ふ頃がある。この内に自然は曲線を創り人間は直線を創ると言ふ事を述べて居る。然も終り頃には今日知られて居る自然方則は殆んど全部何等かの意味で直線的な物であると云はれて居る。成程この様に云はれて見るとその通りである様な氣がする。構造力学にしてもその基礎は直線的である様な氣がするしその爲にアメリカでタコマ橋が落ちた様な氣持になる。又土に對する力学等はその曲線的性質を人間が直線的に現はさうとして苦心して居る跡が見られない事もない。